

名古屋におけるムスリムコミュニティの様相

—モスクの活動および日本人女性による自主活動の展開—

クレシ サラ好美

1. はじめに

(1) 研究の背景

1980年代以降急増したニューカマーと呼ばれる滞日外国人の中には外国人ムスリムがいる。かれらは比較的早い時期から賃貸アパートなどをムサッラー〔一時的礼拝所〕¹として、情報交換や相互扶助を行うムスリムコミュニティ〔以下、コミュニティ〕を各地に形成してきた。コミュニティ内で集められたサダカ〔任意の寄付〕により、1990年代には関東に9か所、東海と北陸に各1か所のモスク〔専用礼拝所〕が設立され(店田・岡井 2009:7)、2000年代以降はこの動きが各地に拡大、モスク設立ラッシュを経て2020年現在、日本には100か所以上のモスクが存在する(Okai 2020:99)。桜井(2003)や店田・岡井(2008; 2009)らによる網羅的な各地のモスク・ムサッラー調査は、急増する外国人ムスリムと彼らが作るコミュニティの様相を明らかにするという点で、滞日ムスリム研究の礎を築いた。

一方、来日した外国人ムスリムの多くが20~30代の独身男性であり、彼らと国際結婚する日本人女性〔以下、日本人女性〕の数は1990年頃から急増する(桜井 2003:192)。彼女らは結婚に際してイスラームに入信するが、女性がモスクに出入りする習慣のなかったコミュニティ草創期には(工藤 2008:113)、イスラームの知識を得ることもまた同じ境遇の仲間を得ることも容易でなく、孤立し悩む日本人女性は少なくない状況があった。本研究は、そうした中で問題解決に取り組む日本人女性に焦点を当て、彼女らを巻き込み発展するコミュニティの様相を明らかにするものである。

(2) 先行研究

2000年代から本格化した日本のムスリム研究は、上掲のモスク・ムサッラー調査のように、主に俯瞰的視点から行われてきた。近年は、特定のコミュニティに絞った活動の詳細が報告されつつあるが(川添 2017; 子島・服部 2019)、いずれも外国人男性の活動を中心に描かれている。女性の関与が見

えにくいのは、現在でも女性用スペースが設けられていないモスクがあるなど（店田 2015:47）、コミュニティが外国人男性を中心に形成されているとの認識が一般的であるためと思われ、また、女性用スペースのあるモスクでも男性研究者の立ち入りが許されないなど（川添 2017:31）、女性保護の慣習が女性への聞き取りを困難にしていることも理由の一つであろう。しかし、「宗教団体においても、日本人配偶者女性に期待される役割は、決して少なくない」という福田（2012:243）の指摘もあり、その実態を明らかにする作業は慣習に妨げられない女性研究者に委ねられている。

だがこれまで、日本人女性に向けられた関心は主に外国人ムスリムの妻としてのもので、そこで扱われるのは家庭内の力学、家族形成、入信後のイスラームへの適応過程などであった（竹下 2003; 工藤 2008）。社会的活動に関わる日本人女性については、外国人男性の起業やコミュニティ形成に関する論考の中で夫の活動を下支えする妻の姿を垣間見ることが出来るほか（福田 2012:150, 242-243）、コミュニティの歴史に関する記述の中で日本人女性が運営する集会の様子が一部紹介される程度であり（クレシ 2020:35）、コミュニティの活動に参画する日本人女性に焦点を当てた研究はみられない。

(3) 本研究の課題

そこで本研究は、コミュニティの発展過程に日本人女性がいかに関わってきたかを明らかにすることを目的とする。研究の対象は、宗教法人名古屋イスラミックセンターの運営下にある名古屋モスクとそれに付随するコミュニティとし、その成立と発展過程を追いながら、これに関わる日本人女性について詳述する。その記述はすべて、2020年5～8月に複数回行った名古屋モスク代表および理事への対面あるいはメールを使用した聞き取り調査、宗教法人名古屋イスラミックセンター保管の資料²、コミュニティ内の集会運営に関わる女性らへのアンケート結果³、集会関係者保管の資料⁴によるものである。

2. モスク設立までのコミュニティ

本節では、名古屋のコミュニティ草創期である1987～1998年を取り上げる。外国人男性がモスク設立を目指す一方で、日本人女性もまた結婚・入信に伴い遭遇する困難を乗り越えようと活動を始める、それぞれのコミュニティの基礎が築かれていく様子をまず明らかにしたい。

(1) 名古屋イスラム協会

名古屋モスクの母体となったのは、1987年1月、留学生らにより結成された名古屋イスラム協会〔以下、イスラム協会〕である。結成当初、留学生らは資金を出し合って名古屋大学近くに賃借したアパートをムサッラーとし、学生の中からイマーム〔礼拝の先導者〕役を選び、成人男性にとって義務である金曜礼拝を行っていた。1990年頃から、流動的な留学生らに代わって自営業のパキスタン人ムスリム A がその活動をサポートするようになり、賃貸物件の契約やハラール肉の自給体制確立などに功勞する（クレシ2020）。

しかし、ムサッラー用のアパートは住宅街にあったため、外国人が集まることで近隣の不安を招き、退去を通告されるたびに移転を繰り返し、1992年4月、大学から地下鉄で2駅離れた繁華街近くのビルの一室を賃借することになる。室内は以前より狭く賃料は高額で負担は大きく、留学生が講義の合間に立ち寄るには不便であったが、他に選択肢がないまま以後6年間ここをムサッラーとした。金曜礼拝には、留学生らに交じって外国人就労者らの参加も目立つようになり、土曜日にはアラビア語やハディース〔預言者の伝承〕の勉強会が開かれ、その後参加者が親睦を深める食事会がもたれるなど、学びや交流を通して外国人男性のコミュニティが形成されていく。

ところでこの時期、愛知県内でも外国人ムスリムと日本人女性との国際結婚が増えつつあった。クルアーン(2:221)には「多神教の女とは、かの女が信者になるまでは結婚してはならない」とあり、ムスリムと結婚する女性にはイスラームへの改宗が義務付けられる。女性がキリスト教徒やユダヤ教徒である場合は啓典の民として本来結婚は許されるが（クルアーン5:5）、当時数の多かったパキスタン人やバングラデシュ人らは出身国においてそうした例を見ないため、キリスト教徒であっても夫から改宗を求められるのが普通だった。入信も結婚も2人以上のムスリムの証人がいれば成立するものではあるが、大使館などに提出する入信証明書や結婚証明書を発行できるのは、当時は東京のイスラミックセンター・ジャパンか神戸モスクしかなく、名古屋在住の者には不便であった。そこで、前出のAが自営する会社をイスラム協会の連絡先とし、イスラミックセンター・ジャパンとの取次を始めた。

また、食品の原材料が詳細に表示されていなかった当時⁵、宗教的禁忌と

される原材料の混入を恐れて、市販の加工食品が買えないという悩みがムサッラーの集まりでよく話題に上がっていた。これを受け、日本人である A の妻が食品メーカーに調査を行い、ハラール〔宗教的に合法であるもの〕の食品を品目ごとに整理したリストを冊子にし配布した。A とその妻はこのほかに、イード〔イスラームの祝日〕のための礼拝会場の手配⁶、メディアへの対応なども行う。こうしたムサッラーの外での活動は、ムサッラー利用者に限らず広く県内在住のムスリムの生活を支えるものであり、イスラム協会を中心とするコミュニティの規模が拡大しつつあったことを示す。

(2) 日本人女性の集会

他の地域同様、名古屋のコミュニティにも女性用スペースはなく、日本人女性が顔を合わせるのは、家族同伴で参加する年に 2 回のイード礼拝かラマダーン月〔イスラーム暦 9 月〕のイフタール〔日没後に断食を解く食事〕の席くらいであった。それは彼女らにとって、同じ境遇の女性らとの情報共有の機会が非常に限られていたことを意味する。インターネットがまだ普及しておらず、書店でもイスラーム関係の書籍が並んでいることが珍しかった当時、イスラームの知識を得ることは容易でない。礼拝や断食などの戒律のほかにも、「ムスリムとしての生活実践」——例えば日常的に夫の出身国の民族衣装を着用すること、髪の毛を切らずに長く伸ばすこと、実家や旧友との交際の制限、結婚前からの趣味の禁止など——がイスラームの名の下に夫から要求されることに戸惑い、それを相談する相手もなく、途方に暮れる日本人女性は少なくなかった。

1994 年 3 月、そうした孤立する日本人女性の一人であった A の妻が、イスラム協会主催のイフタール会場でトルコ人の妻に出会う。初めての日本人女性との交流を通して問題共有する仲間の必要性に気づいた二人は、定期的なお茶会の開催を計画する。たまたま開催前日に結婚証明書を受け取りに A の会社を訪れたパキスタン人の妻 B をも誘って、一回目のお茶会が開かれた。その後お茶会は毎月第 1 土曜日に A の個人宅で継続開催され、イード礼拝などの機会に日本人女性を勧誘しながら参加者を増やしていく。当初はお茶を飲みながら気楽にお喋りを楽しむだけの集まりだったが、同じ境遇だからこそその問題共有やその解決のための情報交換——例えば宗教的禁忌を避けた食材の入手方法、女性医師のいる産婦人科の情報、子の名付け方、出生後の剃髪や割礼、保育園・幼稚園の給食対応など——も行われ、ときに誰

かが吐露する文化的宗教的ギャップに関する悩みも、共感者を得ることで軽減されるなど、外国人ムスリムとの結婚生活に不安や不満を抱え悩む日本人女性にとっての駆け込み寺的な役割をも担うようになっていく。

お茶会を続けるうち、「ムスリムとしての生活実践」の内容が人によって異なったり、なぜその実践を行うかの理由を夫から得られず困惑する女性の声が頻繁に聞こえるようになってくる。そこで毎月第3土曜日に勉強会を開催し、理解し納得したうえで実践することを目的に、日常生活の指針が記されているハディースの輪読や当時入手しにくかったイスラーム関連書籍の共有を行い、礼拝の仕方やアラビア文字の読み方を学ぶ機会が作られた。夫の期待に応えようと努力をしつつも、埋められない文化的宗教的ギャップに苛立ち懊悩していた日本人女性が、勉強会を通してイスラームの世界観を理解し、その信仰の対象を知ることによって、新しい生き方を積極的に受け止め自信を深めていくようになる。

お茶会も勉強会も、孤立する日本人女性が知識や情報そして共感者を得るための、当時としては唯一の機会であった。だが集会に参加することで、これまで従ってきた「ムスリムとしての生活実践」に夫の出身地域や家庭の習慣が混在していることや、夫が日本での生活に合わせて宗教的義務や禁忌のルールを省略していることに気づく場合もあり、妻が勉強することを快く思わない夫や妻の外出を好まない夫から、会への参加をけん制される女性がいた。また当時は、子どもをイスラームの環境下で育てたいと望む夫の意向で母子のみで海外移住させられる事例も多く、継続参加を断念する者もいた。毎回の参加者は5～15人程度だったが、当時の参加者名簿によれば、1度でもこの集会に参加した日本人女性は、岐阜や静岡など隣県からの参加者も含め200人を超える。外国人男性がイスラーム協会を拠点にコミュニティを拡大する一方で、日本人女性は個人宅の集会でもう一つのコミュニティを築いていった。

(3) モスク建設への動き

政府の策定した「留学生10万人計画」や外国人技能実習制度などの入国管理法の改正も影響して、金曜礼拝に集まるムスリムの数は漸増し、ムサラはさらに手狭になっていく。高額な賃料の負担といつまた退去を通告されるかわからない不安もあり、永続利用可能なモスクの設立を求める声が高まっていった。

戦後のモスク設立の流れにおいては⁷、工場やコンビニなどの中古物件を買い取って改築するという手法が主流であるが、モスクとしてゼロから設計し建設することにこだわった A は、妻とともにモスク用の土地探しから始める。留学生の利便性を考えて名古屋大学から移動しやすい地下鉄東山線の駅から徒歩圏内であること、近隣の不安を招かないよう住宅街でなく交通量の多い大通り沿いであること、この2条件を満たす物件を見つけるのに丸4年を費やした。その後、イスラム協会に「モスクプロジェクト」が組織され、国内外の個人および諸団体に寄付を募るため外国人男性らが奔走、土地購入から建築まで必要な資金約6780万円を調達した。

1998年7月、約18坪の狭小地に完成したモスクは、2つのミナレットを含むあずき色の鉄骨造陸屋根4階建てで、1階は事務所、2階は女性礼拝室、3階と4階が男性礼拝室となっている。特筆すべきは、当時のモスクとしては珍しく女性用スペースを確保したこと、そしてそれが当初の設計では4階に配置されていたにもかかわらず、子どもを抱いた母親が階段を上る負担を考慮して、建築途中で2階に変更された点である。これは、Aがその妻を通してお茶会に参加する日本人女性らの声を反映することが可能であったからで、男性優先のコミュニティが各地に多い中、女性に配慮する姿勢は、現在まで一貫して続く名古屋モスクの特徴である。

3. モスク設立時のコミュニティ

本節では、モスク設立以降の1998～2004年について扱う。モスクというハード面は整いながらも、これを維持し運営するための活動は相変わらずAの肩にかかっており、Aの妻もそれを補佐しながら女性関連の活動を一身に背負っていた時期である。

(1) 名古屋モスクの活動

モスク設立による最も大きな意義は、それまで金曜礼拝のほかは土曜日の夜のみ行っていた集団礼拝を毎日5回行えるようになったことである。だがこの時点では、まだモスク常駐のイマームはおらず、礼拝参列者の中からその都度選任されるか、短期的にエジプト人やウガンダ人などのハーフィズ〔クルアーンをすべて暗記した人〕を雇用してイマーム役を任せていた。

その他の変化として、ムサッラーで行っていた金曜礼拝と土曜日の勉強会、Aの会社で行っていた結婚や入信の手続き、イード会場の手配、メディアへ

の対応などの諸雑務は、すべてモスクの活動に集約されることになった。ラマダーン月の日曜日のみ企画されていたイフタールの提供とタラウィーフ〔ラマダーン月に奨励される夜間の礼拝〕はひと月間毎日行われるようになり、さらに、出張講義やモスク見学の依頼への対応、希望者へのイスラーム関連冊子の提供、葬儀の手配なども、モスクの新しい活動に加わった。とはいえ、モスク建設に多額の寄付を注ぎ込んだコミュニティに常駐の職員を雇用する余裕はなく、Aがモスク近くに自宅を移してこれらの活動に対応し、その妻がこれを補佐することになる。イマーム職としての専門教育を修めた者が常駐するのはこれより11年先、事務担当職員を雇用するのは18年先のことである。

(2) 日本人女性の活動

モスク設立以降、個人宅で開かれていたお茶会と勉強会は、2階の女性礼拝室に場所を移して行われることになり、それまで人づてに広まっていた集会の存在がより広く認知され参加者は急増、一度に30人以上の女性が集まることもあった。だが認知度が上がるにつれ、外国人男性からいくつかの批判が上がるようになる。出身地域の習慣によっては、礼拝施設であるモスクを集会目的に使用することや女性が集まること自体を忌むべきと考える者がおり、また自国から妻を呼び寄せた者からは外国人女性を交えないことへの反発もあった。

Aの妻が日本人女性のための集会にこだわった理由は、一つには言語の問題がある。集会の使用言語をウルドゥ語や英語にすることで日本人女性が参加を敬遠すれば、当時唯一ともいえる知識と情報そして共感し合う仲間を得るための機会を失することになり、それは彼女らが再び孤立化することにつながる。そしてもう一つ、未知の文化や宗教に適応できずに悩む日本人女性が、出身地域の習慣を絶対視する外国人からの善意の助言によってさらに追い詰められる事例が少なくなかったこともある。例えば当時、醤油に含まれる微量のアルコール成分に反応した外国人ムスリムからの「醤油禁止令」に困惑する日本人女性が、醤油の使用を諦められないことに罪悪感を抱いて「苦しい。苦しい、後ろめたい。自分を責める、夫とけんかする、病気になる。悩んだ、悩んだ。でも誰に相談したらいいのか（ムスリム新聞 1994:23）」と苦しむ声は珍しくなかった（クレシ 2017:8-10）。民族衣装を「イスラミックドレス」だと主張する外国人ムスリムから日本の一般的服装の着用を非

難され、結婚前から続けてきたピアノや乗馬はイスラーム的でないからと禁止され、夫の同伴しない外出を禁じられた女性の中にはベランダで涼んでいたことを咎められた者もあり、また日中誰とも話さない寂しさを紛らすために鳥を飼いたいという告白に共感して涙を流す同じ境遇の女性もいた。こうした文化的宗教的ギャップに起因する戸惑いは、ムスリムとして生まれ育った外国人には些末な問題と片付けられがちであり、それがさらに日本人女性の悩みを深刻にする場合があった。

文化的宗教的ギャップに起因するものとして、ハラール食材の調達のにくさも話題に上がった。当時のハラール食材店といえば、アパートやマンションの一室に大型冷凍庫を置いただけのいわゆるアンダーグラウンドの店しかなく、賞味期限を記した蓋の部分が破り取られた商品が売られ、電気代節約のために冷凍庫内の温度がある程度下がると電源を切ってしまうなど、日本人には躊躇されるものであった。だがハラールであることを優先する外国人には、食品衛生法に基づく営業許可の有無は問題視されない。男性店員しかいないアパートやマンションの一室を訪れることを夫が許さないため、食材調達に不便を感じる日本人女性もあり、またそこで得られるのは、日本の一般市場で売られているような部位別にパックされた肉でなく頭部を切り落としただけの丸鶏であり、これを捌くことに抵抗を感じるという声も多かった（クレシ 2017:7）。

ハラールに関してはほかに、幼稚園や保育園で弁当持参を断られた話や、除去食を願い出る方法もよく話題に上がった。アレルギー対応が一般的でなかった当時は、園児が揃って同じ給食を食べることを方針とする園が多く、いくつもの園と入園前交渉を重ねるのは日本人母の役割だった。入園後も、クリスマス会や花祭りなどイスラーム的でない行事がある月には、夫の意向で準備期間を含め長期欠席の申し入れをする必要もある。ムスリムとして日本人としてどちらにも異を唱えられず葛藤する日本人女性に、それなら幼稚園に通わせなければいいと速断する外国人の提言は響かない。不毛な議論に苦悩する日本人女性にとって、たとえ問題が解決しなくとも、同様の葛藤を抱える立場からの共感を得て疎外感を軽減する場があることの意義は大きかった。

もちろん問題解決への試みもあった。例えば、上述の悩みを受けて A の妻は、2001年5月にハラール食材店を、2002年4月にムスリム子弟向け保育施設を開く。前者では、保健所より営業許可を取得し、女性客が利用しや

すいよう女性店員を雇い、日本の一般市場に近い形態で買い物ができるようにハラール鶏肉を部位別にパックして販売した。後者では、配食業者に特別注文した海鮮のみの給食か弁当持参かの選択ができるようにし、日本の幼稚園で祝う諸行事に代えて季節ごとのお楽しみ会を開き、また保育終了後には、イスラーム学習の課外クラスを設けるなどした。保育施設への送り迎えが主に母親の役目であり、また食材店も女性客の利用が多かったことから、互いの家を行き来したり誘い合って食事に出かけるなどモスク外での交流も始まり、日本人女性が孤立して悩んでいたかつての状況は急速に改善されていた。

4. 発展していくコミュニティ

本節では、コミュニティのソフト面が充実していく 2004 年以降の様子を明らかにする。仲間を得た女性が負担を分散しながらコミュニティに積極的に関わっていく時期である。

(1) 自主グループの成立

2004 年 7 月、多忙に加え非難中傷が重荷になっていた A の妻がお茶会の中止を発表した日、海外移住から戻ったばかりの B が 7 カ月ぶりにお茶会に参加した。会の継続を希望した B は、「参加者がお客様感覚だった」ことを反省し、急遽古参の日本人女性らを集め今後の運営を話し合う。その際の議事録によれば、現状での問題点として「毎回の勉強の内容及びそのコーディネート、質問への返答、お茶等の用意、ベビーシッターその他全てを一人のムスリマ⁸（及びその家族）に押し付けてしまっていた事」が示され、今後は「一人のムスリマだけに負担がかからない様に」複数人で係を分担することが提案された。

軌道に乗り始めた頃のお茶会のプログラム（2005 年 2 月 5 日付）には、「(1) 託児の説明&ご協力をお願い／(2) 自己紹介／(3) 今日の勉強『200 のハディース』を読む...2 章 23 より／(4) アスル〔午後の礼拝〕後～ いろいろな質問、情報交換／(5) 3:50～ 来月お茶会のお知らせ&サダカ〔任意の寄付〕をお願い／(6) ○○さん〔講師の名前〕による勉強／(7) 4:45～ 片付け／(8) 5:00 解散」とあり、子ども連れの参加者のために託児係の分担が行われていること、お茶やお菓子が参加者からのサダカで賄われていたこ

と、その後続く勉強会の講師役もまたプログラムの一つを担当する係として位置づけられていることがわかる。

それまで急な予定変更の際には参加者名簿をたどって何件もの電話連絡をし、新規参加者や継続参加が難しい女性への個別のフォローといった負担が、この時期、インターネットの普及によって軽減される。2005年4月に参加者の一人が開設したメーリングリスト「ムスリマなごや」〔以下、ML〕は、登録者への一斉連絡を可能にし、さらにお茶会の場に足を運べない者にも情報の交換や共有を容易にした。開設当初のMLを辿ると、「ムスリマサロン」と名付けられた個人宅での交流会の企画が頻繁に話し合われている。これは、モスクに敷居の高さを感じたり子どもと離れることを好まない女性も気軽に参加できるようにと始められたもので、その後公共施設を借りるなどして不定期に開催される新たな集會に発展、県内外から50人ほどの親子が集まることもあった。

ところでこの頃、日本はイスラーム的な子育ての環境が整っていないと考える夫の意向で、母子のみでの海外移住が頻繁に行われていた。B自身もその困難を経験した者として、海外移住を望まない日本人女性のために日本におけるイスラーム教育の前例を作ろうと子ども勉強会を始める。Aの妻が運営する保育施設を利用する母親らを誘い、毎週土曜日の保育後モスクに移動して、手作りアラビア語カードや紙芝居を使って遊びの延長でイスラームの基本を伝えたり、モスクのイマーム役のハーフィズにアラビア文字やクルアーン暗唱の個別レッスンを依頼して、その順番待ちをする子どもたち相手に塗り絵やカード遊びをさせたりと、教材も経験もない中で母親らの試行錯誤が続いた。

子ども勉強会のためにモスクに集まる母親らを見たエジプト人女性が講師役を名乗り出たことで、2006年8月、お茶会から独立したかたちでの女性勉強会が再開する。ちょうどこの頃、アラブ圏で生活経験のある日本人女性がお茶会に参加し始め、イスラーム的発想を理解しにくい聞き手のために補足説明を行いながらアラビア語の通訳係を務め、勉強会運営に大いに貢献した。初めは子どもの教育に関する学びが中心であったが、その後母親以外の女性をも対象にして、ムスリムとしての生き方や望ましいマナーの解説、ラマダーン月の断食のし方や葬儀の際の遺体の洗浄法など、さまざまなテーマで学習が進められた。

日本人女性お茶会、ムスリマサロン、子ども勉強会、女性勉強会と、集會

の数が増えていく中、各集会の運営係や参加者の相談に乗り、託児の配慮、集会場所の使用許可や時間帯変更に関するモスクとの折衝など、調整役として重要な役割を果たす B をリーダー視する参加者もいた。しかし B があえてそれを否定し自らをコーディネータと称していたのは、「参加者がお客様感覚だった」轍を踏まないよう、役割を分散して自主的に運営する会の実現を目指していたからである。

(2) 自主グループの発展

2010年4月、当時のエジプト人講師の一時帰国が発表された日、8年間のシリア留学を終えて戻ってきた日本人女性 C が女性勉強会に初参加した。突然その場で後継役を任された C は驚きながらもこれを快諾、日本に数少ない貴重な女性有識者として、これ以降コミュニティを支える重要な役割を担うことになる。愛知県内にはモスクが10か所あり、外国人男性は自宅や仕事場に近いモスクに通うのが普通だが、日本人女性がそうした地域の縛りと関係なく名古屋モスクに集まってくる理由の一つに、日本語でイスラームを学ぶ環境が整っていることがあるだろう。それでも子どもや家庭の事情で毎月参加できない女性には、MLで勉強会の資料が共有され自習できるよう計らわれている。当時のMLを見ると、「なぜイスラームが難しいか？ーイスラームが簡単になる方法」のような身近な話題から「ラマダーンを楽しむための下準備ーなぜ断食をするの？」といった時節に合わせた実践的なものまでさまざまに工夫されていることがうかがえる。

5月からは、子ども勉強会の講師役も C が務めることになる。会に同席した B の覚書（2010年5月29日付）には、「アッラーからのプレゼント」というテーマについて、幼稚園から小学生までの15人の子どもたちがシール貼りをしたり自分の考えを紙に書き出したり発表したりといった作業を通して楽しく学ぶ姿や、次回も参加したいと叫んだ子どもの発言が記されている。それまで意味の分からないアラビア語を暗記することの繰り返しだった勉強会とは全く異なる内容に子どもたちが喜び、外国人の出身地域では当たり前の打擲も厭わない指導法に不安を感じていた母親らの安堵の様子もうかがえ、平易な日本語でイスラームの世界観を学べる勉強会の開始はコミュニティにとって朗報であった。

2009年頃から中断していたムスリマサロンが、2011年4月に一度再開されるが、多用のためモスクに行けない B からは、ML（2010年4月7日付）

での確な指示が発せられている。そこには、集会の趣旨説明や開催場所、各参加者の役割分担——例えば開催場所までの引率係・行き先の貼り紙をモスクに用意する係・タイムキーパー・帰途の引率係・子どもたちのおやつを用意する係・それぞれの係を募る係など——が整然と記されており、直接対面しなくともコミュニティを運営できるようになったこの状況は、お茶会初期にAの妻が孤軍奮闘していた頃とは隔世の感がある。その後もBがモスクに行けない期間が2年間ほど続くが、MLを利用しながらコミュニティの調整は支障なく果たされていた。むしろこの期間、その不在を補って各集会の運営係や講師らのより積極的な関与が見られるようになり、Bがお茶会の後継を引き受けたときから目指していた、参加者の「お客様感覚」からの脱却が加速する結果にもなった。

5. コミュニティの現況

本節では、2020年1月現在の自主グループによる各集会の概略を記す。長い年月の間に再編や失敗を繰り返し現在のかたちに落ち着いた会もあれば、まだ試行錯誤の過程にある歴史の浅い会もあるが、参加者の幅広いニーズに合わせてさまざまな集会在日本人女性によって運営されていることがわかる。

(1) 女性のための集會

① 日本人女性お茶会：第1土曜日 3～5時

1994年に始まった個人宅でのお茶会が何度か再編されながら現在に至る。途中、Bが不在だった2年間ほど外国人女性の参加を受け入れていたが、それにより参加を躊躇う日本人女性からの訴えが複数寄せられたため、日本人であるがゆえの悩みや葛藤を共有するという当初の趣旨を反映し元の形態に戻る。交流を目的とした気楽な会話や情報交換の場であり、入信前や入信直後の女性からの質問や悩みに古参の者が経験から助言を与えることが多い。

② 女性勉強会：第2・3・4土曜日 3～5時

2011年より、日本人講師と外国人講師が交代に担当する勉強会に再編され、第2・4土曜日はCが講師を務め、第3土曜日の講師は初めエジプト人であったがほどなくしてインドネシア人になり、現在に至る。学びの場であるため参加者の国籍は問わず、前者は参加者の3分の1をインドネシア人女

性が占めることもあり、後者にも日本人女性が参加しやすいよう通訳係が待機し日本語資料が用意されるなどの配慮がある。

③はじめてのイスラーム：第2土曜日 2～3時

上記の女性勉強会が主にムスリム向けであるのに対して、初めてモスクを訪れる日本人向けに、2018年に始まった初心者向け勉強会。モスクの見学者対応の延長としてAの妻が講師役を務め、日本でありがちな誤解や偏見を解消するための説明を行う。

④子育てのスナを聞く会：第4土曜日 2～3時

妊娠中・子育て中の母親のために、2019年に始まった母親向け勉強会。Cが講師役を務め、子育てに役立つハディースを解説する。

いずれの集会も、事前にMLあるいは自主グループ用のサイトで開催内容を告知する係があり、当日のお茶の用意や清掃、新規参加者への声掛けなど、すべて役割分担して行われている。これらを運営する係5名に行ったアンケートでは、集会をやめたいと思ったことがあるかという問いに全員が「ない」と回答し、苦労話の類は一切聞かれないことから負担の分散が奏功していると確認できる。集会を続けて良かったかという問いに全員が「そう思う」と回答し、その理由として、イスラームの理解を深められること、知識を身につけて諍いが減ること、孤立しがちな女性らの横のつながりができたことが挙げられる。持病で通院する毎日を過ごしながらも13年間運営係を務める女性は、月に一度、病院関係者以外と関わられることを「とても嬉しい」と喜ぶ。

(2) 子ども世代のための集会

①子ども勉強会：第1・2・3・4土曜日 3～5時

Cにより再編された子ども勉強会は、2012年、同じくシリア留学から帰国したCの妹を講師役に再々編された。お茶会や勉強会に参加する母親のための託児も兼ねているため、長時間の参加で子どもたちが退屈しないようプログラムが工夫されている。前半は、複数名の女性がアラビア文字の個別指導を行う間に別の女性が工作などで順番待ちの子どもの相手をし、お菓子タイムをはさんだ後半で、Cの妹がイスラームの話聞かせる。参加者の中心は小学生だが、卒業後も継続参加する中高生や親同伴の幼児もいる。

②幼児クラス：第1・3土曜日 3～5時

2014年、未就学の幼児を持つ母親らにより始められた母子で参加する幼児

向け教室。現在も複数名の女性によって運営され、塗り絵や工作、絵本や紙芝居などを通して楽しくイスラームの世界観に触れられるよう工夫されている。

③SYM 名古屋モスク：毎週土曜日 5～6時半

中学生以上の年代の子どもたちの仲間づくりを目的に、2014年に立ち上げられた中高生お茶会が始まり。2017年、参加者の成長に合わせて、若い世代のムスリムの居場所（Space for Young Muslims）という意味でSYM名古屋モスク〔以下、SYM〕に名称変更。日本人女性が見守り係として同室するほかは、基本的に子どもたちの自主性に任せた自由な交流の場である。その詳細は次項で詳述する。

④SYM にほんごクラブ：第4土曜日 5～6時

日本語を母語としない中高生を対象に、2019年8月から始まった学習支援教室。ボランティアの大学生らが講師役を務め、参加者の作文の添削を行ったり学校の宿題を手伝ったりしている。Bが進路相談に乗ることもある。

これらを運営する係5名に行ったアンケートでは、集会をやめたいと思ったことがあるかという問いには幼児クラスに関わる3名が「ある」と回答している。具体的には、「教材がなく困った」「準備を休みたい、代わってほしいと思う事がありました」など、イスラーム教育の教材が日本では入手しにくいことが準備の負担につながっていると思われ、それはかつて前例のない中で試行錯誤をしながら子ども勉強会を運営していた母親らの姿に重なる。経験の蓄積がない中で新しい試みを続ける努力はコミュニティ内で幾度となく繰り返されてきたことであるが、負担の分散が重要課題であることもまた明らかであり、周囲の協力は喫緊の課題であろう。とはいえ、この3名を含め全員が、集会を続けて良かったかという問いに「そう思う」と回答している。その理由に、「子供達が仲間を作ることができたし、イスラームの事も理解し楽しんでくれていたので。私自身も楽しめました」「年の近いムスリムのお友達と会うきっかけとなる。母親同士の情報交換が出来る」などが挙げられ、難しさを訴えながらも集会の運営によって得られる達成感の大きさがうかがえる。

(3)SYMの詳細

中学生以上の年代の子どもたちのモスク離れは、国内の多くのコミュニテ

ィに共通する深刻な問題である。幼い頃親に連れられてモスクに来ていた子どもたちが、次第に塾や部活動を言い訳にモスクを敬遠するようになる背景の一つに、先述したような外国人の出身地域のやり方を踏襲した指導の影響もあるだろう。しかし、コミュニティから離れた子どもは周囲にムスリム仲間を得られず、周縁化の経験や学校と家庭の価値観の狭間で生じる葛藤を誰とも分かち合うことができない。かつて孤立していた日本人女性に共感者が必要だったように、子ども世代にも同じ境遇の仲間と出会う場が必要だと考えた A の妻は、調整役の B と相談し、この頃中学生に成長していた先述の保育施設利用者らに声をかけて中高生お茶会を始める。これが現在の SYM である。

他の会同様、定期的集まる場があることは新規参加者を勧誘しやすい。次第に県内外から子どもたちが集まり交流を深めることで、周囲との差異に悩み自己定義に困難を感じる経験が自分だけの特殊なものでないことを知り、ともすれば周縁化につながりやすい重層的な属性にも自信を持てるようになっていく。イスラーム学習を行わないことについて一部の外国人から批判はあるが、家庭でイスラームをまったく学ばずに育ちながらも、ここでムスリムとしてのアイデンティティに目覚めて礼拝を始めた子どももいるように、知識の獲得よりまず共感者を得て自己の属性に自信を持たせることを A の妻と B は優先する。

自らの文化的宗教的背景を肯定できるようになった子どもたちにとって次に必要なのは、自分の言葉で周囲の無理解を正す術を身につけることだと考えた A の妻は、学校単位で見学に来る高校生や大学生へのイスラーム紹介の場に、引率教員の許可を得て子どもたちを同席させることにした。交流会と称するこの企画は 2015 年から 2020 年までに 16 回行われ、その都度見学者からの質疑応答を子どもたちに任せてきた。初めて参加する子どもたちは「質問の内容にびっくりした」「理解してもらうことが難しいことを実感しました」という感想を持つが、何度かの経験を経て「理解してもらえてよかった、本当に嬉しい」「伝えることで何かが変わるからワクワクした」という感想に変わっていき（名古屋モスク a; b; c）、最近では、個人で見学に来る学生の SYM への飛び入り参加にも慣れた様子で対応できるようになってきた。

中高生の会が始まった当時、自身の葛藤に向き合うのに精一杯だった中学生らは、現在大学生あるいは社会人になり、年少の参加者を気遣い相談に乗

ったりイベントの企画や実行にもかかわったりするようになった。偏見を正し誤解を解く喜びを知ったかれらの成功体験は、さらに多くの人々に伝えたいという願いにつながり、2019年5月からはインターネットの動画サイトを利用した発信も始められている（SYM a; b）。その様子は、女性の集会在「お客様感覚」を脱してコミュニティを成熟させてきた経緯に重なり、近い将来、SYMも若い世代によって自主運営されていくことが予想される。日本の学校教育を受けかつムスリムとしてのアイデンティティを持つかれらが、どちらの価値観をも理解できる立場を活かして、これからのコミュニティのけん引役となり、また日本社会とムスリムとの懸け橋になることに大きな期待が寄せられる。

6. 名古屋モスクの現況

2009年9月、モスクは常駐のイマームを迎えた。イスラーム圏における最高教育機関アル=アズハル大学にてイスラーム学を専攻し、政府からイマーム職としての任命を受けたエジプト人で、これほどに知識と経験豊かなイマームは国内のモスクでも珍しい。これ以降、毎日5回の礼拝および金曜礼拝がこのイマームの先導で執り行われるほか、土曜日にクルアーンやアラビア語のクラスが開かれ、また宗教的判断を要する相談や質問には随時対応できるようになった。

2019年までにモスクで取り扱った入信の手続きは1041件、結婚の手続きは700件に上り⁹、モスク利用者の数はますます増加している。設立当時は余裕のあった礼拝室も、およそ300人が集まる金曜礼拝には全て収容しきれず、2013年と2017年にそれぞれ購入したモスクに隣接する2つの建物にも分散して収容している。イード礼拝の参加者は2009年には1000人を超え、2016年には2000人を超え、より広い会場の手配と当日の人員整理もモスクの課題となっている。このほか、ラマダーン月のイフタル提供とタラウィーフ、葬儀の手配も設立以来継続して行っており、2013年からは海外の篤志家によるハッジ〔巡礼〕への日本人ムスリム招待の取りまとめも行うなど、ムスリムを対象とした活動は多岐に渡る。

日本人に向けた対外的な活動は、2014年5月以降、Aの妻が担当している。ホームページをすべて日本語表記に変え、内容を大幅に改編して見学者受け入れの案内ページを整えたことで、それまで毎年数十人程度だったモスク見学者は2014年後半だけで200人を超え、その後毎年300～400人

の見学者がモスクを訪れるようになった¹⁰。2020年12月現在、国内にあるモスク100か所のうち日本語でホームページを開設しているモスクはわずかに16か所、そのうち見学者受入れの案内ページを有するものはその半分にも満たない現状を考えるに、イスラームに関心を寄せる日本人の受け皿が圧倒的に足りていないことは明らかである。それは、日本人の多くが抱くイスラームへの「厳しい／過激な／怖い」といった偏見や誤解の根深さとリンクして、子どもたちの周縁化や葛藤を深める一因になる。子どもたちが暮らしやすい環境を実現するためには、モスクと日本社会との接点を増やすことが重要であるという考えから、モスク見学者への対応をはじめ教育機関への出張講義や自治体・企業での講演、地域との交流、他宗教との交流、自治体との連携など（名古屋モスク d; e; f; g）、対外的活動に力を入れる。

2016年9月には、事務担当職員としてパキスタン人の妻である日本人女性を雇用した。事務処理や日本語での来訪者対応を行うほか、外国人ムスリムと日本人との仲介役を果たし、Aの妻の負担を軽減する。また土曜日の各種集会でいくつもの係を引き受けまたその補佐をしてBを支える。国内各地のモスクに共通する問題として、違法駐車や騒音、モスク前の路上で大勢がたむろすることによる通行妨害などがよく聞かれ（子島編 2020:5-6）、「異質なものに対する不安、紛争や宗派間対立などイスラームに対してネガティブ・イメージを抱く地域住民（店田 2015:87）」も多く、運営者および利用者の言語の壁や常識の違いにより有効な対策を立てることは容易でない。これに対しこの職員は、「日本文化から外れないイスラームを体現すること／機会を見つけて外国人に日本文化を伝えること」を意識していると語る通り、地域住民に対応する際にはモスクの代弁者として極めて常識的な日本人らしさを見せ、またモスク代表であるAが運営の方向性を模索する際にはその判断が日本的価値観と乖離しないよう軌道修正を図っている。彼女もまた、外国人の多いコミュニティが周辺地域と分断されないための重要な接点の役割を果たす、コミュニティ運営に欠かせない人材といえる。

7. おわりに

本研究は、名古屋におけるコミュニティの事例を取り上げつつ、その形成に関わる日本人女性の活動について検討してきた。知識獲得や情報共有の機会がないために孤立し悩む女性らが集まり始まった小さなコミュニティは、

インターネットの普及やいくつもの偶然の出会いをきっかけに拡大し、負担を分散しながら多くの女性を巻き込んで発展してきた。その背景に、女性の活動のきっかけを作った A の妻と、それを引き継ぎ発展させた B、その 2 人を常に応援し協力を惜しまなかったモスク代表の A それぞれの貢献があり、これに加えて、知識豊富なイマームや日本人の有識者 C、献身的な女性職員、負担を分散するため各会の運営に積極的に関わる女性らの協力があった。そしてこれを受け継ぐ者として、SYM に集まる子どもたちにもまた、日本社会における根深い偏見や誤解を解消して、ムスリムが暮らしやすい環境を築いていく将来が期待されている。過去・現在・未来においてコミュニティに関わるこれら一人ひとりの活動こそ、共生を実現するためのジハード〔アッラーのために行う努力〕と言えるだろう。

本研究の学術的意義は、第一に、当事者の語りと経験をもとに名古屋のコミュニティの様相を詳述したことである。また第二に、日本人女性の活動に光を当てることで、これまで男性中心に語られてきたムスリムコミュニティ形成史を再検討するための新たな視点を提供したことである。本研究が、今後の日本のムスリム研究に新たな一石を投じるものになることを願う。

国内のコミュニティの中には、設立時から変わらず外国人男性を中心に構成されているところが少なくない。そこで起こる地域住民との関係構築の困難さは、偏見や誤解を解消する機会を遠ざけてその地域に暮らす子どもたちの周縁化を助長しかねない。また、各地で進むモスク運営者の高齢化と子どもたちのモスク離れが、コミュニティの存続を危うくする可能性も否めない。こうした問題の解決の鍵となるのは、ともすればイスラーム的価値観を優先しがちな外国人と日本社会との間を取り持ち、外国人親世代と日本で育つ子ども世代両者の思いに寄り添うことができる日本人女性の存在なのではないだろうか。異なる文化の橋渡し役としての日本人女性については、別稿で具体例を交えて論じたい。

- 1 イスラーム辞典（大塚ほか編 2002:963）の「モスクは礼拝専用場所であるが、ムサッラーは家屋や事務所の1区画を必要に応じて礼拝場所とする」という定義に従い、本稿では、礼拝専用で設立された永続利用可能な施設を「モスク」と呼び、賃貸物件や施設内に設けられた礼拝所を「ムサッラー」と呼んで区別する。
- 2 名古屋イスラム協会会議録（1988～1998年分）、イード礼拝チラシ（1995～2019年分）、結婚および入信の手続き取扱数集計表（1998～2019年分）、モスク見学者リスト（2010～2020年分）、名古屋モスク規則、宗教法人認可申請関連書類、イマーム招聘関係書類、ほかメモ類。
- 3 2020年8月に自主グループ関係者に行った記述式アンケート。設問は次の通り。①集会名、②目的・内容、③会の流れ、④参加者、⑤開始時期、⑥開始の経緯、⑦集会に関わった年数、⑧集会を続けてきて良かったか、⑨集会をやめたいと思ったことはあるか、⑩印象的な出来事。
- 4 お茶会配布資料（1994～2004年分）、お茶会名簿（1994～2007年分）、女性勉強会配布資料（1994～2010年分）、お茶会再編に関する会議録（2004年8月7日付）、お茶会プログラム（2004～2005年分）、メーリングリスト「ムスリマなごや」投稿記事（2005～2019年分）、女性勉強会覚書（2006～2011年分）、子ども勉強会提案書、子ども勉強会覚書（2010年分）、モスク関係者間で交わされたメール（2012～2020年分）、ほかメモ類。
- 5 特定原材料の5品目の表示義務と特定原材料に準ずる19品目の表示推奨は、「平成13年厚生労働省令第23号」が施行された2001年4月以降のこと（厚生労働省2001）。
- 6 イスラームにおける二大祭であるイードには、午前中に集団礼拝が行われる。1990年代半ばの名古屋のコミュニティでは、家族を伴って約200人がイード礼拝に集まったため、ムサッラーには収容しきれず、市内の貸ホールが手配された。
- 7 戦前と戦後のモスクの設立様式の違いは、店田(2015)を参照。
- 8 「ムスリマ」は女性ムスリムを指すアラビア語。本稿では、引用部分と固有名詞を除き、日本語として定着している「ムスリム」を男女にかかわらず使用する。
- 9 モスク設立の1998年に行われた入信と結婚の手続きはそれぞれ24件と8件、10年後の2008年には39件と28件、20年後の2018年には51件と46件と漸増している。ちなみに、直近の2019年はそれぞれ74件と48件であった。
- 10 これ以降の見学者の数は、2015年339人、2016年351人、2017年410人、2018年305人、2019年249人。2018年以降の数字が下がっているのは、2018年9月から始まった初心者向け講座に女性見学者を誘導したためと思われる。

参照文献（日本語）

- 大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之共編(2002)『岩波イスラーム辞典』岩波書店
- 川添航 (2017)「外国人定住化時代におけるイスラーム系宗教施設の役割とその拡大ー東京都豊島区『マシド大塚』を事例として」(『新地理』65(3)) 16-33 ページ
- 工藤正子 (2008)『越境の人類学ー在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会
- クレシ サラ好美 (2017)『ハラールとハラール認証ームスリマの視点から実情と課題を語る』慶應義塾大学湘南藤沢学会
- _____ (2020)「名古屋におけるムスリムコミュニティの様相ー戦前期と現代のモスク設立の動きを中心に」(『人間科学研究』32(2)) 27-38 ページ。
- 厚生労働省医薬局食品保健部長通知「食品衛生法施行規則及び乳及び乳製品の成分規格等に関する省令の一部を改正する省令等の施行について」(平成13年3月15日食発第79号 https://www.cao.go.jp/consumer/history/02/kabusoshiki/syokuhinhyouji/doc/130530_shiryou2-4.pdf (2020.12.15 閲覧))
- 桜井啓子 (2003)『日本のムスリム社会』筑摩書房
- 宗教法団日本ムスリム協会 (1982)『日垂対訳・注解 聖クルアーン』
- 竹下修子 (2003)「国際結婚におけるエスニシティの表象としての宗教ー外国人ムスリムと日本人女性のカップルの場合」(『家族研究年報』28) 14-26 ページ
- 店田廣文 (2015)『日本のモスク 滞日ムスリムの社会的活動』山川出版社
- 店田廣文・岡井宏文編 (2008)『日本のモスク調査1ーイスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室
- _____編 (2009)『日本のモスク調査2ーイスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室
- 名古屋モスク a「モスク見学の高校生との交流(1)ー聖霊高等学校」
<http://nagoyamosque.com/4650.html> (2020.12.15 閲覧)
- _____ b「モスク見学の高校生との交流(3)ー愛知県公立高等学校」
<http://nagoyamosque.com/5478.html> (2020.12.15 閲覧)
- _____ c「モスク見学の高校生との交流(4)ー高校生団体マナビイニシアチブ」
<http://nagoyamosque.com/6120.html> (2020.12.15 閲覧)
- _____ d「講演・出張講義のお知らせ」
<http://nagoyamosque.com/visit-lecture/oshirase> (2020.12.15 閲覧)
- _____ e「更新情報 地域との交流」
<http://nagoyamosque.com/category/local-report> (2020.12.15 閲覧)
- _____ f「更新情報 他宗教との交流」
<http://nagoyamosque.com/category/otherreligion-report> (2020.12.15 閲覧)
- _____ g「更新情報 自治体との連携」
<http://nagoyamosque.com/category/local-cooperation> (2020.12.15 閲覧)
- 子島進編 (2020)『モスクによる地域交流ワークショップ』東洋大学アジア文化研究所
- 子島進・服部美奈 (2019)「在日ムスリムによる地域交流ーモスクでの聞き取り調査から」(『アジア文化研究所研究年報』53) 54(185)-66(173) ページ

福田友子 (2012) 『トランスナショナルなパキスタン人移民の社会的世界 – 移住労働者から移民企業家へ』 福村出版
『ムスリム新聞』 30号 (1994年12月20日)

参考文献 (英語)

Okai, Hirofumi (2020) “Analysis on Non-Muslim Residents’ Perceptions of Islam and Muslims in one Local Japanese Community” (『共愛学園前橋国際大学論集 20』) 99-119

参考資料 (動画)

SYM a 「ヤングむすりむチャンネル」

https://www.youtube.com/channel/UCMd_pyi4t3jMqbR2eeTmw-w (2020.12.15 閲覧)

_____ b 「むすりむ Tube」

<https://www.youtube.com/channel/UCI7MR44iAlSTXyP5gqbpzKg> (2020.12.15 閲覧)

クレシ サラ好美 (くれし さらよしみ)

早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員 / sarah@mehran.co.jp

(2020年12月14日原稿受付、2021年3月31日掲載決定)